

高齢男性の依存性に関する一研究

松田 智子

【抄録】

本稿の目的は、性別役割分業を基盤とする高齢夫婦の問題、特に高齢男性の配偶者への依存性に焦点をあて、その依存性を規定している要因を明らかにすることである。ロジスティック回帰分析の結果、配偶者への依存度が高い群と低い群を分けるのは、学歴、家事遂行度、夫婦愛意識の3変数であった。すなわち、高学歴の男性、家事遂行度の低い男性、夫婦愛意識が強い男性で配偶者に対する依存度が高くなっていった。これらの分析結果から、高齢男性の中でも特に高学歴層に配偶者への依存度が強いこと、高齢男性の配偶者に対する依存性を軽減するためには、男性の家事分担の促進、夫婦愛にとらわれない意識が重要であることが明らかとなった。

キーワード：高齢男性、妻への依存性、学歴、家事遂行度、夫婦愛意識

I. はじめに

1990年代に入り、さまざまな男性問題が顕在化しはじめた。例えば、会社・仕事中心で「社畜」と評されるような男性の生き方、妻からの「定年離婚」の申し出に戸惑う中年男性、退職後家庭に居場所がなく「粗大ゴミ」扱いされる熟年男性、「濡れ落ち葉」「わしも族」と呼ばれる自立できない初老の男性たちなどである⁽¹⁾。こうした中高年男性に対する厳しい批判は、夫が仕事以外では無能力で、家族に依存することでしか老後の生活も楽しめない存在になってしまっていることへの妻たちの苛立ちを表しているともいえよう。

長寿社会の到来によって、最初に生き方、老い方の変化を迫られたのは女性であった。女性のライフサイクルの変化をみると、エンプティ・ネスト期が30年以上に長期化し、夫との死別後のシングル期間も約8年に伸びている。女性にとって、中高年期をいかに生きるかが大きなテーマであった。しかし近年では、夫が会社人間であった間に、妻は職業活動、趣味活動、地域活動などの社会活動に積極的に関わることが増え、これまでとは異なるライフスタイルをもつ中高年女性が多く出現している。

他方、男性側の変化に着目すると、「脱サラ」などの言葉は広まったが、基本的には仕事にコミットする会社人間である形態は変化しなかった。バブル崩壊後、終身雇用や年功賃金が見直される中、働く男性たちも対応を迫られているが、家族生活においては依然妻に依存的な状況にある。

中高年男性の妻に対する依存性はさまざまなデータによっても示されている。例えば、NHK『家族についての世論調査』（1997年）によれば、老後の夫婦イメージを尋ねると「夫婦は一心同体」の回答は、女性よりも男性で多くなっているのに対して、「夫婦であっても自分は自分でありたい」の回答は、男性よりも女性で多くなっている。さらにこの回答を60歳代の男女に限定してみると、男性では「一心同体」の比率が最も高いのに対して、女性では「自分は自分」が最も多くなっている。すなわち、男性は年齢が上がるほど妻との一体感を重視し依存的な意識が強くなっているのが特徴である。

また、総務庁の『高齢者の生活と意識 第4回国際比較調査結果報告』（1997年）によれば、寝込んだときの世話を期待する相手として、60歳以上の高齢男性では8割以上が「妻」と回答しているのに対して、同世代の女性では「夫」を挙げる比率は約4割と少なくなっている。心配ごとや悩みの相談者をみても、高齢男性では、「妻」が81.6%と圧倒的な比率を占めているのに対して、高齢女性では、「夫」45.6%、「同居の子ども」47.9%、「別居の子ども」46.2%、「親しい友人」18.9%と、配偶者、子ども、友人に分散する傾向が認められる。このような高齢男女のネットワークのズレ、すなわち男性のネットワークが配偶者に偏るのに対して、女性のそれは配偶者に限らず、子ども、他の親族、友人などに拡散するという知見は、これまでの研究においてもたびたび報告されている⁽²⁾。

なぜ、高齢期の夫婦関係において、夫の配偶者への依存度が強くなるのだろうか。高齢男性の依存性の問題を検討するには、基本的属性のみならず、心理的・社会的側面を検討することが重要であるが、そうした研究はほとんど見当たらない。同じ高齢男性であっても、その人のおかれた環境や日常生活のあり方によって、「配偶者への依存度が強い」群と「配偶者への依存度が弱い」群とに分かれると考えられるが、どのような要因がこの2つのタイプを分けるのだろうか。

本稿では、高齢男性の配偶者に対する依存性について理論的検討を行い、高齢男性の依存性に影響を与えている要因をデータ分析によって明らかにする。具体的には、高齢男性の依存性を説明する仮説を複数提起し、それぞれ検証を行う。

II. 仮説の提起

〈仮説1〉 高齢、高学歴、無職、核家族世帯、都市居住の男性は、配偶者に対する依存度が強い

第1に、高齢男性の配偶者に対する依存性は社会的属性によって差があるかどうかを明らかにしたい。まず、高齢になると、加齢の影響で心身機能が低下することから、高齢男性の配偶者への依存度は強くなると考えられる。世帯構成の影響については、援助資源の規模の小ささという点で、三世代家族世帯よりも核家族世帯の男性の方が、妻への依存度は高いと予想される。また、就職状況の影響については、退職後の生活を再構築し新たな関係を形成していくことは困難であることから、有職の男性よりも無職の男性の方が配偶者に対する依存度は高いと考えられる。さらに、居住地域や学歴が及ぼす影響であるが、例えば高橋は、高学歴のホワイトカラー層には、近隣との日常的接触をもたず、町内会・自治会にも加入していない「地域離脱型」が多いことを明らかにしている⁽³⁾。山根らも、都市居住者、高学歴、社会経済的地位の高い男性は、家族限定的な介護ネットワークをもつことが多く、女性よりもより伝統的、家族依存的であることを指摘している⁽⁴⁾。したがって、都市部居住や高学歴男性ほど、配偶者への依存度は強いと予想される。

以上の検討から、高齢、高学歴、無職、核家族世帯、都市居住の男性ほど配偶者への依存度が強いという仮説を提起できる。

〈仮説2〉社会的ネットワークの規模が小さい高齢男性は、配偶者に対する依存度が強い

第2に、高齢男性の配偶者に対する依存性は、社会的ネットワークによってどのように影響を受けるのかを検証したい。夫婦関係と社会的ネットワークに関する研究には2つの異なる立場がある。ボット (E. Bott) はロンドン在住の家族を対象にインタビューを行い、夫婦の役割分離は、社会的ネットワークの結合度と関連しているという仮説を導き出した。すなわち、緩やかなネットワークをもつ家族では、夫婦の役割関係は合同的になり、逆に緊密なネットワークをもつ家族では、夫婦の役割関係は分離的になることを明らかにした⁽⁵⁾。他方、ウェルマンとウェルマン (B. Wellman & B. Wellman) は、トロントの家族を対象に調査した結果、夫婦関係のあり方が世帯外ネットワークを規定していることや、緊密な世帯外ネットワークと援助的な夫婦関係とは競合するものではなく両立することなどを明らかにした⁽⁶⁾。日本においては、野沢が大都市と地方都市の2つの地域で調査し、夫婦間の援助関係が妻と夫の属性や世帯外ネットワークにどのように規定されるのかを分析している。その結果、①夫婦共有の友人ネットワークや援助的な親族ネットワークは、夫婦間の情緒的な依存関係と両立、平行していること、②地方都市では地域的親族ネットワークが、大都市では職場ネットワークと近隣ネットワークが、夫婦関係の特定の側面を規定していることを明らかにしている⁽⁷⁾。

本稿では、高齢男性の社会的ネットワークのあり方が配偶者に対する依存度を規定するという観点から、社会的ネットワークの規模の小さい男性ほど、配偶者への依存度が強いという仮説を提起する。規模の大きい社会的ネットワークを組織している場合は、子ども、近隣、友人といったさまざまな人々から援助を受けることができるのに対して、社会的ネットワークの規

模が小さい場合には、そうした人々から援助が得られず、配偶者への依存度は強まると考えられる。

〈仮説 3〉家事遂行度の低い高齢男性は、配偶者に対する依存度が強い

「平成 8 年度社会性活基本調査」(総務庁)によれば、高齢男性の家事時間は 60～64 歳で 20 分、65～69 歳で 26 分、70～74 歳で 30 分である。高齢になるにつれて、家事時間が増えるとはいえ、同年齢の女性の家事時間が 3 時間以上であることと比較すると、高齢男性の家事遂行は低い水準にある。

性別役割分業型の夫婦関係は、夫の仕事への強いコミットメント、妻の家事・感情マネージ役割の遂行という補完関係によって維持されている。しかし、このような役割分担は結果として高齢男性の生活能力を奪い、配偶者に対する依存度を強めることになる。高齢男性が死別の際に抱える問題の多くは、こうした生活面や精神面での自立の欠如に関係している。例えば岡村は、高齢男性が配偶者との死別後に経験する困難の 1 つは家事の負担感であり、これがモラルを低下させることを報告している⁽⁸⁾。これらのことから、高齢男性の家事遂行度と配偶者への依存性との関連については、仮説 3 は妥当であると考えられる。

〈仮説 4〉夫婦愛意識および性別役割分業意識が強い高齢男性は、配偶者に対する依存度が強い

現代の夫婦関係の特徴づける規範意識は、夫婦愛意識と性別役割分業意識である。これらの意識は、特に中高年男性に強く支持されており、低い家事遂行の実態と並んで、男性の配偶者に対する依存性を規定する重要な要因であると考えられる。

山根らの研究によれば、家族愛意識や性別役割分業意識が強い人の介護ネットワークは家族や親族に限定される傾向にあるのに対して、逆にこのような意識の弱い人の介護ネットワークは、非親族や専門機関にまで広がる傾向にあることが明らかにされている⁽⁹⁾。そこで、夫婦愛意識および性別役割分業意識が強い男性ほど、配偶者への依存度が強いという仮説 4 を提起できる。

III. 方 法

1. 調査の方法

本稿で用いるデータは、平成 8 年 11 月にコープこうべ・生協研究機構の依頼、助成を受けて実施した「中高年期の夫婦関係とソーシャル・ネットワークに関する調査研究」⁽¹⁰⁾から得られた。調査対象者の高齢男性およびその配偶者は、兵庫県の神戸市東灘区・垂水区、西宮市、加東郡社町、神崎郡神崎町のいずれかに在住で、①男性が大正 11 年生まれ～昭和 11 年生ま

れ、②夫婦であることを条件に、各地区の選挙人名簿から250カップルずつ、合計1250カップルを無作為抽出によって選定した。

調査票の配布および回収は郵送法によって実施し、全体の回収率は39.7%であった。各地区ごとの回収率は東灘区42.4%、垂水区41.6%、西宮市44.4%、社町30.4%、神崎町37.2%であり、郡部の回収率が都市部よりやや低くなっている。

2. 分析対象者の属性

本稿の分析で用いるのは、高齢夫婦カップルの夫の回答である。分析対象となる夫の基本属性について述べると、まず年齢構成は、59～65歳43.8%、66～74歳56.3%である。学歴は、高等学校が38.3%と最も高く、次いで小・中学校35.9%、大学21.4%となっている。就労状況を見ると、定年による退職が多く無職は43.1%を占めている。なお、有職者の中では、パートや団体職員・専門職・自由業が多くなっている。世帯構成は、子どもの排出期後の向老期、退隠期の家族ライフ・ステージにあたるため、夫婦のみ世帯が58.5%と最も高く、夫婦と未婚の子どもいる世帯は25.6%、三世代家族世帯は15.9%である。居住地域をみると、都市部(神戸市東灘区・垂水区、西宮市)が64.7%、郡部(加東郡社町、神崎郡神崎町)が34.1%であり、都市部居住者の占める割合が約3割高くなっている。

3. 概念の測定と分析方法

(1) 概念の指標化

① 依存性

まず、依存性の指標化であるが、「かりに不幸にして、夫婦のどちらかが亡くなったとして、より困るのはあなた方夫婦のうち、どちらですか」について「配偶者がより困る」「私がより困る」「どちらが先に亡くなっても、あまり変わらない」の3つの選択肢によって測定した。そして、3つの選択肢のうち「私がより困る」の回答を、対象者の配偶者に対する依存性を示す指標とした。

図1は夫、妻それぞれの回答分布を示している。夫の回答をみると、「私がより困る」が73.3%と最も高く、「配偶者がより困る」「どちらが先に亡くなっても、あまり変わらない」はそれぞれ16.4%、10.3%と低くなっている。他方、妻の回答をみると「私がより困る」3.2%、「どちらが先に亡くなっても、あまり変わらない」9.6%、「配偶者がより困る」67.2%であり、夫との間に統計的に有意な差が認められた($\text{Chi-Square}=31.60$ $p<.001$)。つまり、「私がより困る」の比率は妻よりも夫に圧倒的に高く、夫の配偶者への依存性の高さが改めて浮き彫りとなっている。

② 社会的ネットワーク

社会的ネットワークは、規模、頻度、密度、方向性、多重性などによって捉えられるのが一

高齢男性の依存性に関する一研究（松田智子）

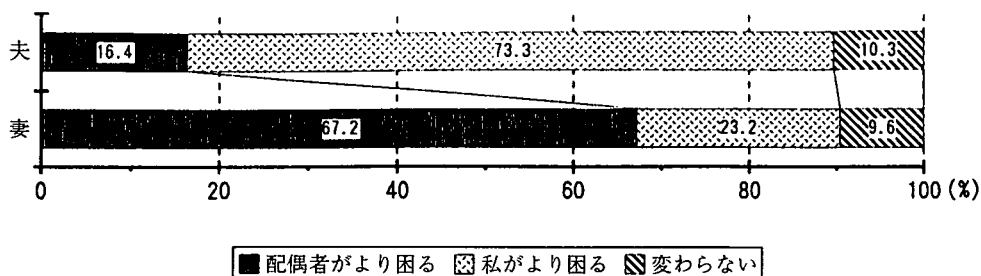


図1 配偶者に先立たれるとどちらが困るか

般的である⁽¹¹⁾。ここでは、社会的ネットワークの規模に着目して、子ども数、きょうだい数、親しくしている近隣数、親しくしている友人数を用いて測定した。表1～表4の通り、各変数の回答分布をみておくと、子ども数は「2人」が約半数を占め、次いで「3人」19.7%、「1人」15.6%である。「子どもがいない」は4.1%である。きょうだい数は「3人」～「5人」が全体の約6割を占める。親しい近隣数は、「誰もいない」が32.3%と最も高く、次いで「5人」「3人」が続いている。親しい友人数は、「5人」「10人」が19.2%で最も高くなっているが、「11人以上」も19.1%存在する。「誰もいない」は12.2%である。

③家事遂行度

従来用いられてきた家事概念は、フィジカルな家事とメンタルな家事の2つに大別することができる⁽¹²⁾。本稿ではフィジカルな家事に着目し、具体的には「食料・日用品の買い出し」「お茶やコーヒーをいれる」「食事の用意」「食事のあとかたづけ」「ふとんのあげおろし」「風呂のそうじ」「脱いだ洋服の整理・整とん」「ごみ出し」「印かん・通帳などの管理」の9項目について、「いつも」「ときどき」「たまに」「まったくない」の4件法で測定し、9項目の合計点を家事遂行度の指標とした。クロンバックの α 係数は.81、平均値20.00、標準偏差は6.07であった。なお、各家事項目の回答分布は表5に示している。「いつも」「ときどき」をあわせた比率をみると、遂行度が高いのは「印かんや通帳などの管理」「脱いだ洋服の整理・整とん」「ふとんのあげおろし」「ごみ出し」、遂行度が低いのは「食事の用意」や「食事のあとかたづけ」である。

④夫婦愛意識と性別役割分業意識

本稿の分析で用いる意識変数は夫婦愛意識と性別役割分業意識である。夫婦愛意識は「夫婦の情愛は、親子の情愛より強いものだ」について「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の4件法で測定した。また性別役割分業意識は「男性が外で働き、女性が内で家事をするのが望ましい」について「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の4件法で測定した。それぞれの項目の回答分布は表6に示しているが、「そう思う」と「ややそう思う」をあわせた比率は、いずれの項目にお

表1 子ども数 (%)

0人	4.1
1人	15.6
2人	55.8
3人	19.7
4人	4.4
5人	0.4

N=482

表2 きょうだい数 (%)

一人っ子	6.3
2人	14.5
3人	22.1
4人	21.7
5人	15.4
6~12人	20.0

N=475

表3 親しい近隣数 (%)

0人	32.3
1人	5.8
2人	9.2
3人	12.1
4人	2.3
5人	14.6
6人	3.3
7人	1.3
8人	1.5
9人	0.2
10人	11.0
11人以上	6.5

N=480

表4 親しい友人数 (%)

0人	12.2
1人	3.6
2人	8.4
3人	8.9
4人	2.1
5人	19.2
6人	4.2
7人	1.5
8人	1.3
9人	0.2
10人	19.2
11人以上	19.1

N=474

表5 夫の家事遂行

	いつも	ときどき	たまに	まったく ない	MEAN	S. D.	N
・食料・日用品の買い出し	13.9%	34.3%	34.5%	17.3%	2.25	0.93	469
・お茶やコーヒーをいれる	13.7%	28.5%	34.3%	23.4%	2.32	0.98	466
・食事の用意	4.1%	13.0%	34.6%	48.3%	1.73	0.84	462
・食事のあとかたづけ	5.6%	18.4%	31.7%	44.3%	1.85	0.91	467
・ふとんのあげおろし	26.5%	19.7%	22.6%	31.2%	2.42	1.18	468
・風呂のそうじ	14.5%	19.2%	26.1%	40.2%	2.08	1.08	468
・脱いだ洋服の整理・整とん	26.6%	20.3%	24.8%	28.3%	2.45	1.16	467
・ごみ出し	23.0%	23.0%	30.4%	23.5%	2.46	1.09	473
・印かん・通帳などの管理	32.8%	11.6%	12.7%	32.9%	2.34	1.32	473

(注) MEAN および S. D. は、「いつも」を4、「ときどき」を3、「たまに」を2、「まったくない」を1として算出している

表6 夫婦愛意識と性別役割分業意識

	そう 思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	まったくそう 思わない	MEAN	S. D.	N
〈夫婦愛意識〉 ・夫婦の情愛は、親子の情愛よりも強いものだ	42.5%	34.2%	20.5%	2.7%	1.8	0.9	473
〈性別役割分業意識〉 ・男性が外で働き、女性が内で家事をするのが望ましい	44.1%	31.3%	21.0%	3.5%	1.8	0.9	485

(注) MEAN および S. D. は、「そう思う」を4、「ややそう思う」を3、「あまりそう思わない」を2、「まったくそう思わない」を1として算出している

表7 分析に使用した変数とカテゴリー区分

変数	カテゴリー区分	
社会的属性		
年齢	(MEAN: 66.16 S. D.: 4.01)	
学歴	1=大卒	0=中卒・高卒
就労状況	1=無職	0=有職
世帯構成	1=夫婦のみ世帯 夫婦と未婚の子どもの世帯	0=三世大家族世帯
居住地域	1=都市部	0=郡部
社会的ネットワーク		
子ども数	(MEAN: 2.06 S. D.: 0.85)	
きょうだい数	(MEAN: 4.03 S. D.: 1.86)	
親しい近隣数	(MEAN: 4.60 S. D.: 6.99)	
親しい友人数	(MEAN: 8.23 S. D.: 10.42)	
家事遂行		
家事遂行度	(MEAN: 20.00 S. D.: 6.07)	
夫婦愛意識と性別役割分業意識		
夫婦愛意識	1=そう思う ややそう思う	0=ややそう思わない そう思わない
性別役割分業意識	1=そう思う ややそう思う	0=ややそう思わない そう思わない

いても7割以上を占めている。

(2) 分析方法

仮説1～仮説4を検証するために、依存性を従属変数とするロジスティック回帰分析を行った。独立変数として用いたのは、年齢、学歴、就労状況、世帯構成、居住地域、子ども数、きょうだい数、親しい近隣数、親しい友人数、家事遂行度、夫婦愛意識、性別役割分業意識の合計12の変数である。このうち、学歴、就労状況、世帯構成、居住地域、夫婦愛意識、性別役割分業意識はダミー変数として投入した。各変数のカテゴリー設定と区分は表7に示す通りである。

IV. 結果および考察

ロジスティック回帰分析結果は表8に示した。12の独立変数のうち、依存性に対して統計的に有意な影響を及ぼしたのは、学歴、家事遂行度、夫婦愛意識の3変数であった。学歴と夫婦愛意識は依存性に対して正の影響、家事遂行度は依存性に対して負の影響を有していた。なお、3変数以外の独立変数（年齢、就労状況、世帯構成、居住地域、子ども数、きょうだい数、親しい近隣数、親しい友人数、性別役割分業意識）については、依存性との間に統計的に有意な関連は確認されなかった。

表8 夫の依存性に対する属性・ネットワーク・意識変数の影響
(ロジスティック回帰分析)

	非標準化ロジスティック係数
年齢	-0.0658
学歴 (→高)	0.7550*
就労状況 (→無職)	0.5628
世帯構成 (→核家族世帯)	-0.2778
居住地域 (→都市部)	0.1423
子ども数	-0.3162
きょうだい数	0.0174
親しい近隣数	0.0256
親しい友人数	-0.0072
家事遂行度	-0.1152***
夫婦愛意識 (→肯定)	0.6095*
性別役割分業意識 (→肯定)	0.0549
定数項	7.5586
モデル Chi-Square (df=12)	45.039***
モデルの適合度	352.814

*p<0.05 ***p<0.001

1. 社会的属性と依存性

仮説1は次のようであった。高齢、高学歴、無職、核家族世帯、都市居住の男性は、配偶者に対する依存度が強い。分析結果によれば、社会的属性として投入した変数のうち、学歴だけが依存性との間に統計的に有意な関連を示した。これは、学歴という変数が、高齢男性の依存性に対して、年齢、就労状況、世帯構成、居住特性などの差異を超えた関係の強さを有していることを示しており、仮説は部分的に支持された。

「大学卒」の高齢男性が「中卒・高卒」の男性よりも配偶者への依存性が高いという分析結果は、高齢期の夫婦関係に階層差が存在し、高学歴層と低学歴層とでは夫婦関係が質的に異なることを示唆している。一般に、高学歴の男性ホワイトカラー層ほど、中年期には、会社人間として仕事に没入し、家族も稼得役割以上のものを求めない傾向が強い。こうした中年期の仕事へのコミットメントの強さが、高齢期における配偶者への依存性の高さとして顕在化すると考えられる。

2. 社会的ネットワークと依存性

社会的ネットワークと依存性の関連については、社会的ネットワークの規模が小さい高齢男性は、配偶者に対する依存度が強いという仮説2を提起した。分析結果によれば、子ども数、きょうだい数、親しい近隣数、親しい友人数のいずれの変数も、依存性に対して統計的に有意な説明力を有しておらず、仮説は支持されなかった。

なぜ、社会的ネットワークと依存性との間に関連が認められなかったのだろうか。その理由

として、社会的ネットワークの援助機能という点では、高齢男性にとって、子ども、きょうだい、近隣との関係は、配偶者との依存関係を軽減するような援助資源ではないことが示唆される。なぜなら、子ども、きょうだい、近隣との関係はキーパーソンである妻を介しての交流という性格が強いからである。また、友人関係も高齢男性にとっては配偶者への依存度を弱めるほどの援助資源として機能しない。アラン（G. Allan）によれば、男性の友人関係は、「交際（sociability）」と「親密さ（intimacy）」という区分でみると、より「交際」の性格が強いことが明らかにされている⁽¹³⁾。「交際」という結びつきは、仕事を基盤にしたものを含め、文脈に拘束され、状況に依存しやすい関係で、援助資源にはなりくにくいことと考えられる。

3. 家事遂行と依存性

家事に関する仮説は次のようなものであった。家事遂行度の低い高齢男性は、配偶者への依存度が高い。分析結果によれば、家事遂行と依存性との間には統計的に有意な負の関連が確認され、仮説は支持された。すなわち、家事遂行度の高い男性ほど配偶者への依存度が低くなり、逆に家事遂行度の低い男性ほど配偶者への依存度が高くなっていった。

高齢男性の自立を促す上で、家事分担の重要性はこれまでもにも指摘されているが、本稿の分析からも、配偶者に依存する男性と依存しない男性を分けるのは、家事遂行度であることが改めて確認された。

4. 夫婦愛意識、性別役割分業意識と依存性

夫婦愛意識、性別役割分業意識が強い高齢男性は、配偶者への依存度が高いという仮説4を提起した。分析結果から、夫婦愛意識が強い男性ほど、配偶者への依存度が高いことが明らかとなり、仮説は部分的に支持された。

なぜ、夫婦愛意識と高齢男性の配偶者への依存度とが関連するのだろうか。第1に、夫婦愛意識が強い男性ほど、配偶者を中心とした閉じた関係をつくりやすく配偶者への依存度が強まることが考えられる。第2に、夫婦愛意識を検討してみると、そこには「愛という名のもとでの相互扶助」という意味が含まれており、「愛情があるなら、女性が家事をやって当たり前」と意識されやすいと考えられる。すなわち、夫婦愛意識と性別役割分業は暗黙のうちに結びついており、男性の夫婦愛意識が強いほど、配偶者に対する依存度は強まると考えられる。

V. おわりに

わが国では、戦後特に高度経済成長期以降、夫は外で働き、妻は家庭を守るという男女の役割分担にもとづいた家族像が一般化した。本稿の分析対象となった高齢男性は、このような性別役割分業型の夫婦関係を体現してきた世代である。

本稿の目的は、性別役割分業を基盤とする高齢夫婦の問題、特に高齢男性の配偶者に対する依存性に焦点をあて、その依存性を規定している要因を明らかにすることであった。配偶者への依存度が高い群と低い群を分けるのは、学歴、家事遂行度、夫婦愛意識の3変数であった。すなわち、高学歴の男性、家事遂行度の低い男性、夫婦愛意識が強い男性で配偶者に対する依存度が高くなっていた。これらの結果から、高齢男性の中でも特に高学歴層に配偶者への依存度が強いこと、高齢男性の配偶者に対する依存性を軽減するためには、男性の家事分担の促進、夫婦愛にとらわれない意識などが重要であることが明らかとなった。

長寿化が進み、夫婦のみの世帯が増加するにつれて、家庭役割を積極的に担い生活自立することが、ますます重要な課題として中高年男性に突きつけられている。確かに、世論調査などをみる限りにおいては、男性の望ましい生き方について「仕事重視」が減少し、「家庭・地域と仕事の両立」が多数派を占めつつある⁽¹⁴⁾。ただし、こうした意識の変化は、男性の家事分担の増加とは直接的には結びついていない。

こうした中、1999年に制定された「男女共同参画社会基本法」は、ジェンダー・フリーを理想に掲げ、男女が性別にとらわれず、社会のさまざまな分野に対等なパートナーとして参画することを基本目標としている。そのために、法律や制度の整備はもとより、社会の慣習・慣行、人々の意識に至るまで、男女の平等という観点から検討し、改革することが求められている⁽¹⁵⁾。しかし現状をみてみると、女性の職業分野への進出や仕事と家庭の両立問題などについてはより積極的な施策が打ちだされている反面、家庭生活や地域活動における男性の参画を促すような施策（例えば労働時間短縮）は課題として残されたままである。

21世紀にむけて、「脱」性別役割分業型の自立した夫婦関係を構築できるかどうかは、男性の家庭・地域領域への積極的参画およびそれを可能にする社会的システムづくりにいかに真剣に取り組むかにかかっているといえる。

付記

本稿が依拠するデータは、コープこうべ・生協研究機構の依頼、助成を受けた実施した「中高年期の夫婦関係とソーシャル・ネットワークに関する調査研究」から得られてものである。コープこうべ・生協研究機構ならびに共同研究者である杉井潤子氏、玉里恵美子の両氏に御礼申し上げる。

注

- (1) 伊藤公雄 (1996) 『男性学入門』作品社：28。
- (2) Antonucci, T. C. (1990), Social Supports and Social Relationship. in Binstock, R. H. and George, L. K. (eds.) *Handbook of Aging and Social Sciences* (3rd ed.), Academic Press: 205-226.
- (3) 高橋勇悦 (1994) 「地域社会への期待と現実」森岡清志・中村一樹編『変容する高齢者像大都市高齢者のライフスタイル』日本評論社：33-55。
- (4) 山根真理・斧出節子・藤田道代・大和礼子 (1997) 『家族多様化時代における家事分担の変容可能性に関する調査研究』コープ・こうべ・生協研究機構。

高齢男性の依存性に関する一研究（松田智子）

- (5) Bott, E (1971). *Family and Social Network* (2nd ed.), Free Press.
- (6) Wellman, B. & Wellman, B. (1992), "Domestic Affairs and Network Relations", *Journal of Social and Personal Relationships*, Vol. 19.
- (7) 野沢慎司 (1995) 「パーソナル・ネットワークのなかの夫婦関係」松本康編『増殖するネットワーク』剏草書房：175-233。
- (8) 岡村清子 (1992) 「高齢期における配偶者との死別」『社会老年学』No. 36, 東京都老人総合研究所：3-14。
- (9) 山根真理・斧出節子・藤田道代・大和礼子, 前掲書。
- (10) 松田智子・玉里恵美子・杉井潤子 (1998) 『中高年期の豊かな関係づくりに向けて—中高年期の夫婦関係とソーシャル・ネットワークに関する調査研究—』コープ・こうべ生協研究機構。
- (11) ミッチェル, J. 編 (1983) 三雲正博・福島清紀・進本真文 (訳) 『社会的ネットワーク』国文社。
- (12) 山根真理・斧出節子・藤田道代・大和礼子, 前掲書, あるいは松田智子 (2000) 「性別役割分業からみた夫婦関係」善積京子編『結婚とパートナー関係 問い直される夫婦』ミネルバ書房：125-146を参照。
- (13) アラン, G. (1993) 中村祥一・細辻恵子 (訳) 『友情の社会学』世界思想社。
- (14) 総理府 (2000) 『男女共同参画社会に関する世論調査—男性のライフスタイルを中心に—』
- (15) 姫岡とし子 (1999) 「21世紀のジェンダー関係」池内靖子・武田春子・二宮周平・姫岡とし子編『21世紀のジェンダー論』晃洋書房：212-220。

(まつだ ともこ／応用社会学科)

2000年10月18日受理